

【2020年6月8日発行】

THE JAPAN SOCIETY FOR INTERCULTURAL STUDIES

日本国際文化学会ニュースレター45号

<http://jsics.org/>

日本国際文化学会事務局

多摩大学  
グローバルスタディーズ学部事務室内  
〒252-0805  
神奈川県藤沢市円行802番地  
Tel: 0466-82-4141  
Fax: 0466-82-5070  
Email: jsics@gr.tama.ac.jp

## ご挨拶

日本国際文化学会会長 馬場 孝

昨夏の長崎大学での全国大会、エクスカージョンでの東シナ海に沈む夕陽も、「情報交換会」会場からの長崎の夜景も、はるか昔の、別世界での光景のようにすら感じられます。今夏の近畿大学での再会を約して散会いたしました。しかし、ご案内の通り、今年度の現地開催は見送りとなり、共通論題、自由論題のみ「書面開催」といたしました。席上、シンポジウム基調講演者、王向華先生から「2021年の20周年記念の特別大会を香港大学で!」という「呼びかけ」をいただきました。せっかくの機会ですので、開催の方向で準備を始めましたが、その後の香港の政治情勢の悪化と新型ウィルス感染拡大に鑑み、取りやめにいたしました。

1年前のニュースレターでは、私に課せられたのは「つなぐ」役割であるとの私自身の考えを、ご挨拶に代えてお話しさせていただきました。思わぬことが重なった1年目の学会運営でした。しかし、2021年以降へと「つなぐ」ための、いくつかの手がかりも得られたのではないかと考えております。

第1に、多年の課題であった学会事務局の安定的な運営体制です。2021年3月をもって、多摩大学の4年間の「任期」が終了いたします。大変な負担と責務を担っていただいている安田事務局長はじめ、学会事務局の皆様がこの場を借りて厚く御礼申し上げます。「次の事務局」は学会設立以来、常に大きな課題でした。さまざまな模索を重ねるなかで、2021年4月以降、龍谷大学において事務局をある程度「固定した」形でご担当いただく原案がまとまりました。

第2に、2023年までの全国大会の開催予定です。近畿大学には2021年度にあらためて開催の意向を表明していただきました。それに応じて、神戸大学、名城大学には、当初案を「スライド」させ、2022年、2023年の開催をそれぞれご承諾いただきました。常に「3年先」まで開催校が決まっているという態勢を今後も整えていけたらと考えております。

今年度の運営には行き届かない点多々あろうかと存じます。なにとぞよろしくお願いいたします。

## 日本国際文化学会 第19回全国大会延期について

高橋 梓 (近畿大学)

2020年7月11日、12日に予定していた日本国際文化学会第19回全国大会ですが、新型コロナウイルス拡大を受け、延期を余儀なくされました。近畿大学で開催する予定であった本大会では「個別主義の壁、普遍主義の壁—2020年代を切り開く〈ことば〉」という大会テーマに基づき、基調講演・シンポジウムの準備に励んでおりました。同時にたくさんの方の共通論題、自由論題の募集をいただいていたため、このような結果になりましたことは実行委員長として無念でなりません。

しかしながら、今年度の全国大会を「書面開

催」として行う運びとなりました。今年度の応募の中から共通論題と自由論題を会員の皆様にお届けできることは大きな喜びです。また、近畿大学では来年の7月10日、11日に改めて全国大会を開催する予定です。奇しくも来年は日本国際文化学会の設立20周年であり、アニバーサリーに相応しい大会テーマと企画を用意し、万全の状態の皆様をお迎えすることを約束いたします。

会員の皆様におかれましては引き続き大会運営にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

松居 竜五 (龍谷大学)

ICCO(文化交流創成コーディネーター)事務局では、今年度の資格取得のための短期集中セミナーを、8月23日～29日に京都の龍谷大学深草学舎でおこなうための準備を進めておりました。しかしながら、3月以降のコロナウィルスの感染の拡大にともない、セミナーの中止を決定し、4月11日の常任理事会にて了承後、すでに学会HPやメールでご連絡させていただいております。参加校からの年会費も、今年度は免除となり、他の学会の多くの事業と同じく、基本的には一年間の休眠状態となります。

2015年に始まり、京都、沖縄、京都と続けてきたICCO短期集中セミナーにとって、中止という事態は初めての体験です。このセミナーでは毎年、全国の大学から多彩な参加者が集まり、異なる地域

の学生同士で切磋琢磨しながら、熱気のある共同作業がおこなわれてきました。審査委員他の関係者以外にも、多くの学会員にご協力いただき、現地での参加やその後の報告を楽しみにされていた方も多いかと思われま。四年間の学生生活の中で、今年が唯一の参加の機会であったという学生もいるはずで、事務局としても中止という事態を重く受け止めております。

一方で、すでに昨年までにセミナーを受講した学生などのための資格認定の作業は、例年通り年度末に募集するという形で進めております。来年度の短期集中セミナーについては、万全を期した状態でおこなえるように準備を進めていきたいと考えておりますので、これまでも増してご支援をお願いいたします。

## 事務局からのお知らせ

### 【若手研究者紹介への記事を募集します】

本ニューズレターにて連載中の若手研究者紹介に掲載を希望される方を募集いたしております。執筆をご希望される場合は下記学会事務局までご連絡をお願いいたします。

学会事務局Eメール:jsics@gr.tama.ac.jp

### 【年会費納入のお願い】

- ・学会の円滑な運営のため、2020年度の年会費の納入をお願いいたします。
- ・振込用紙がお手元がない場合は、下記よりお振込みをお願いいたします。

■ゆうちょ銀行からお振込みの場合  
ゆうちょ銀行 00210-2-138408  
日本国際文化学会

■他行からのお振り込みの場合  
ゆうちょ銀行  
店名:〇二九(ゼロニキュウ)店(029)  
当座 0138408

- ・年会費未納分は速やかにお振込み頂くようお願いいたします。
- ・過去の会費未納分は相当額の学会誌購入で充当できます。
- ・会費納入に困難を覚える方に対する減免制度もあります。

\*詳細は事務局までお問い合わせください。

# 全国大会のお知らせ

## 【2020年度全国大会書面開催概要】

2020年度の全国大会は新型コロナウイルスの影響を鑑み、書面にて開催致します。書面大会の詳細は下記の通りとなります。

	自由論題	共通論題
討論者	<ul style="list-style-type: none"> <li>自由論題の各報告には、大会実行委員会が「討論者」を1名選定する。</li> <li>報告者は各自の「討論者」を実行委員会に推薦することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>当初の申請時に「討論者」を予定していなかった共通論題の代表者は、「討論者」を選定したうえで申請する。</li> </ul>
セッション	<ul style="list-style-type: none"> <li>実行委員会は、「書面開催」希望の自由論題報告を、いくつかのセッションに区分する。</li> <li>実行委員会は、学会執行部とともに、セッションごとの「司会者」を常任理事のなかから選定する</li> <li>学会事務局は自由論題のセッションの「プログラム」を学会HPに掲載する。</li> </ul>	
ペーパー	<ul style="list-style-type: none"> <li>「書面開催」報告者は、2020年7月11日（土）までに、下記を要件とする「ペーパー」をPDF形式で大会実行委員会宛てに送付する。</li> <li>[内容] 報告の背景となる研究と自由論題での報告内容を反映させたペーパー。</li> <li>[字数] A4（40字×36行）5枚～10枚程度。</li> <li>[形式] 目次、注をつけること。</li> <li>[その他] 報告レジュメ、スライド、関連資料を「ペーパー」に添付しても構わない（字数には数えない）。</li> </ul> <p>字数の範囲内で、20分間の口頭報告では言及できない内容を含むことは構わない。「です、ます」調の読み上げ原稿ではなく、「論文」の文体・形式を取ること。しかし、論文としての決定稿、最終原稿である必要はない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>共通論題における報告者は、自らの報告内容を反映し、共通論題のテーマ内での位置づけを明確にしたペーパーを作成して、代表者に送る。</li> <li>ペーパーの字数は、20分の報告予定時間に対してA4（40字×36行）5枚から10枚を目安とする。目次と注を付ける。</li> <li>代表者はペーパーを取りまとめ、全体の趣旨説明等を付して、7月11日（土）までにPDF形式の文書として、大会実行委員会宛てに送付する。ペーパーの冒頭に代表者のメールアドレスを明記する。</li> <li>ペーパーとは別途、報告用レジュメ、スライド、資料等の添付は任意とする。</li> </ul>
HP掲載	学会事務局は提出されたペーパー等を学会HPに掲載する。閲覧は会員限定とする。	

## 【2020年度全国大会スケジュール】

日程	自由論題	共通論題
7月25日までに	討論者は報告者より提出されたペーパーへの質問、コメントを学会事務局が準備した学会HP所定欄に投稿・掲載する。	
8月1日までに	会員は質問、コメントがある場合に、学会事務局が準備した学会HP所定欄に投稿・掲載する。	
9月1日までに	報告者は質問、コメントへの回答を学会事務局の準備した学会HP所定欄に投稿・掲載する。	代表者は集まった質問、コメントへの回答を学会事務局が準備したHP所定欄に投稿・掲載する。質問に応じて、代表者に代わり、報告者が回答することも可とする。
12月31日	学会HPへの掲載終了	

# 全国大会発表題目一覧

## 自由論題一覧

Japan's sontaku culture as a prism of other-oriented self among Japanese university students  
- a critical examination of Japanese cultural and Internet society

Masayo Aihra (北陸大学 非常勤講師)

Dennis Harmon II (北陸大学 講師)

戦争証跡博物館から探る「アメリカ市民」による焼身行為の記憶のされ方

阿部 碧 (一橋大学大学院博士後期課程)

民国期における密教復興運動について

韋 傑 (龍谷大学国際文化学研究科博士後期課程)

シンガポールにおけるイスラームからの棄教者の社会的包摂をめぐる課題について

市岡 卓 (法政大学大学院国際文化研究科兼任講師)

雑誌『旅』から見る日本統治時代の樺太における観光～オタスの杜の先住民観光を中心に～  
井出 晃憲 (稚内北星学園大学情報メディア学部情報メディア学科准教授)

「表現の不自由展・その後」における天皇をめぐる表現と文化間対話

稲木 徹 (安徽大学外国語学部外籍教師)

韓国民衆歌謡の表象とその多様性－朝鮮半島南北問題を中心として－

齋藤 絢 (名古屋外国語大学准教授)

1940年〈東京オリンピック〉返上をめぐる日中米関係

菅野 敦志 (名桜大学国際学群上級准教授)

私小説におけるプロレタリア文学の位相 ――郭沫若と郁達夫との比較を中心に――

曾 小蘭 (東北大学国際文化研究科アジア・アフリカ講座博士後期課程)

ウイグル文化の各時代における変化とその今後

ビラール イリヤス (長野大学環境ツーリズム学部教授)

台湾撤退後の大陳島民―その軌跡とアイデンティティ

藤田 賀久 (多摩大学グローバルスタディーズ学部非常勤講師)

言語表現の理解に関わる文化の知識に関する考察

増淵 佑亮 (東北大学国際文化研究科博士後期課程)

ヒズメット運動による学校建設の役割と現状：ヨーロッパ諸国を例に

松井 真之介 (神戸大学国際文化学研究科国際文化学研究推進センター協力研究員)

## 共通論題一覧

国際文化学の教育方法としてのスタディツアー―「知識」から「現実感を伴った知性」への転換の  
ために―

[代表者] 坂口 可奈 (北海商科大学商学部講師)

東南アジアの映画は家族をどう描いてきたか

[代表者] 山本 博之 (京都大学准教授)

今回の「国際文化学会 若手研究者紹介」のコーナーには、田中佑実氏(北海道大学大学院)と、中川拓哉氏(名古屋大学大学院)にご寄稿を頂きました。

### 田中佑実(北海道大学大学院文学院)



2019年10月サーリヤルヴィのカルシッコの森で



2018年8月北カレリア地方ユーカのカルシッコの木とそれを受け継いできた家族

現在、私は北海道大学大学院文学院の博士課程に所属しておりますが、修士課程までは佐賀大学に所属しておりました。国際文化学会との出会いは、本学会常任理事でもある木原誠先生との出会いに始まります。大学1年生の春、今は亡き佐賀大学国際文化課程の授業で、とにかく面白いからと促され、木原先生が担当していた「国際文化概論」に出席しました。授業一発目、「妖精学っていうのがあるんだけど、妖精はね、実際にいるんだよ」。私が出席しているのは国際文化概論の授業のはずなのに、一体全体どうして先生は妖精の話をするのだろうと疑問に思った私は「国際文化と妖精はどのような繋がりがあるんですか?」と質問したのです。この質問に対して、なにやらちょっと興奮気味に「この際、際が大切」といって黒板に大きく「際」と書いた木原先生の全身黒でコーディネートされた後ろ姿を今でも鮮明に覚えています。

それから数年後、フィンランドへ留学に行き、自然の美しさ、厳しさに魅了された私は、フィンランドの自然と人間をテーマに木原先生のもとで学位論文を書きました。修士課程で美術史に移り、フィンランドの美術作品に現れる樹木のモチーフから、特に樹木と人間の関わりにアプローチしました。修士課程最後の年、木原先生の勧めで、第16回宮崎公立大学での全国大会で研究成果を発表したのが、学会という空間に足を踏み入れた、初めの一步でした。第18回長崎大学での全国大会でも、フィンランドのナショナル・ロマンティズム時代の風景画に現れる立ち枯れの木からナショナル・アイデンティティの形成について発

表させて頂き、研究論文をインターカルチュラル第18号に掲載させて頂きました。初めての論文を、最初に入会し発表した国際文化学会の学会誌に掲載させて頂き嬉しく思います。国際文化学会の魅力は、様々な分野の研究者が、ある事柄に対してそれぞれの角度から「言い合う」ことができる点だと思っています。また大学院情報交換会も行われ、研究者の育成にも大変力を入れて頂いています。これらのことは、研究の視野を広げることに繋がりますし、異分野間コラボレーションのきっかけにもなると思われま。私の発表の際にも異分野の研究者の方々が聴きに来て、アドバイスをくださいました。この学会に入会して3年が経ちますが、研究者として育てて頂いていること、大変感謝しております。

現在は文化人類学の視点からフィンランドにおける樹木と人間の繋がりを、死者の生没年やイニシャルを樹木に印す「カルシッコ」と呼ばれる樹木の風習を通して明らかにしようと、この風習を今なお続けている老夫婦のもとでフィールドワークをしています。人々と一緒に暮らす中で、カルシッコの樹木がどのような存在で、どのように語られるのかを捉えることに努めています。フィールドでの私は外国人のカルシッコ研究者であり、彼らの孫のようでもある、曖昧な存在です。私がフィールドに入っていくことによって、文化交流の場が生まれているとも言えます。「際」はどこにでも発生しうる重要な点だと思います。今後はこの実践の成果を国際文化学会で発表できたらと考えております。皆さまこれからも、ご指導よろしくお願いたします。

## 中川拓哉

(名古屋大学大学院人文学研究科ドイツ文学専門  
博士候補研究員)



映画雑誌に掲載された『新しき土』の宣伝広告



中川氏近影

### 「国際性」を求めて

私は2017年に日本国際文化学会に入会させて頂き、これまでに3度全国大会にて口頭発表をさせて頂きました。私はドイツ文学に所属しておりますが、日独文化交流を主題とする私の研究にとって「国際文化」という観点から分野を超えて研究者の皆様と交流させて頂けることは非常にありがたい機会となっております。

これまで1930年代における日独合作映画企画に関する分析を報告させて頂きました。日本の映画製作者たちにとって外国への日本映画の輸出は長年の夢となっており、諸外国向けの輸出用映画が断続的に製作されてきました。この取り組みの中で1930年代半ばより「国際映画」と呼ばれる海外向け日本映画が製作されました。

「国際映画」は国外での市場開拓とともに、日本映画の国際的評価の獲得、そして欧米で流布している”誤った“日本像の打破というねらいがありました。上映される国を問わず芸術的に評価され、同時に唯一の”正しい日本“を提示するという点において「国際的」である映画、それが「国際映画」とされてきました。

1937年2月に公開された日独合作映画『新しき土』は最大の国際映画となりました。結果からいえばプロジェクトは失敗に終わりました。『新しき土』では監督したドイツ人のアーノルト・ファンクは日独関係に配慮し、日独両国民の親近性を強調しました。日本の批評家は「ナチ的」であるとしてそれを

激しく批判しました。しかし日本の人々が漠然と描いていた“正しい日本”について、ほかに誰もそれを語る術を提示できませんでした。「国際映画」という呼称は、1940年代に盛んに叫ばれる「国民映画」という呼称に先んじています。この事実は日本が抱えていたナショナル・イメージに対する問題を露わにしています。「国際的」であろうとすることは、世界という枠組みの中で「日本」の像を浮かび上がらせようという意志の表れでもありました。

その後の議論は、日本人であれば“正しい日本”を当然認識しうると言う本質主義的な結論に向かい、「国際映画」の根本意義を否定するものとなります。代わって登場する「国民映画」は、戦時下において自国民にいかにあるべきかを要請するものでした。

執筆時点では日本そして世界がコロナ禍のただ中にあり、いまだ終息の見通しは立っていません。ポスト・コロナの世界は完全に以前の通りとはならないでしょう。今回の危機的体験は、「国家」そして「国際的」である事に対して人々が改めて問いかける機会となっています。私たちは現在、個々人の日常生活のレベルから国家間の関係に至るまで、閉鎖的であることが自衛の手段として要請される状況に置かれています。このような状況だからこそ多種多様な文化間の関係を考察する国際文化学の意義はいっそう大きく、私もより信念を持って研究を進めたいと思っております。改めてまして皆様、今後ともご指導ご鞭撻の程何卒宜しくお願い致します。